

トマトすすかび病の発生について

県内のトマト苗において、葉に褐色の病斑やカビを生じる生育障害が発生し、県農林総合研究センターで原因を調査したところ、トマトすすかび病による被害と判明した。

本県における本病の発生は初めてである。

* 特殊報：新奇な有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

1 病害虫名 トマトすすかび病

〔病原菌：トマトすすかび病菌 *Pseudocercospora fuligena* Deighton〕

2 発生経過

- (1) 平成22年10月8日及び12日、県東部のトマト生産者2戸の施設において育成中の苗の葉に不正型・褐色の病斑や葉の裏面に黒褐色のカビが生じる生育障害が発生した。
- (2) 県農林総合研究センターにおいて被害株上に形成されていた孢子および被害株より分離された糸状菌の孢子を検鏡観察したところ、大きさ、形態から *Pseudocercospora fuligena* と同定し、トマトすすかび病の被害であると判断した。
- (3) 我が国における本病の発生は、これまでに24府県で報告されているが、本県での発生は初めてである。

3 病徴

- (1) 本病は葉に発生し、初め葉裏に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のカビを生じる。葉裏の病斑は次第に拡大して、円形あるいは葉脈に囲まれた不整形の病斑となり、灰褐色～黒褐色に変わる（写真1）。
- (2) 葉表面には、葉裏よりやや遅れて不明瞭な淡黄褐色の病斑が形成され、カビを生じるが、葉裏に比べて少ない。
- (3) 病徴は葉かび病に酷似しており、肉眼での判別は困難であるが、光学顕微鏡で分生子（孢子）の形態を観察すれば容易に区別できる。
- (4) 被害葉は早期に下垂し、乾燥巻縮して葉全体が濃緑褐色のカビで覆われる。発病は下位葉～中位葉に留まり、葉かび病に比べ、株上位への進展は少ない傾向にある。



写真1 被害苗



写真2 病原菌の分生子(孢子)

4 病原菌の特徴と発生生態

- (1) 病原菌は糸状菌（カビ）の一種である。分生子は淡褐色のむち状またはこん棒状で、先端は少しくびれ、小型の油胞がある。大きさは縦 13.3～170.3 μm 、横 2.7～5.6 μm と様々で、0～15 個の隔壁がある（写真2）。
- (2) 病原菌の生育適温は 26～28 $^{\circ}\text{C}$ 、分生子の形成適温は 18～22 $^{\circ}\text{C}$ 、分生子の発芽適温は 26 $^{\circ}\text{C}$ 前後である。多湿条件（過繁茂、換気不十分）の施設栽培で発生しやすい。
- (3) 本菌は被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。
- (4) トマト品種の葉かび病抵抗性の有無に関係なく発病するので、葉かび病耐病性品種に葉かび病同様の症状が発生している場合には、すすかび病の疑いがある。

5 防除対策

- (1) 多湿条件で発生しやすいため、過繁茂を避け、施設の換気に努める。
- (2) 罹病葉や被害残渣は伝染源になるので、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (3) 下表を参考に薬剤散布を行う。

表 トマトすすかび病の防除薬剤例

農 薬 名	系 統	収穫前日数	使用回数
トリフミン水和剤	E B I	1	5
ダコニール1000	有機塩素	1	4
ベルコートフロアブル	グアニジン	1	3
Zボルドー	無機銅	—	—
スコア顆粒水和剤	E B I	1	3

(使用基準は平成22年12月10日現在)